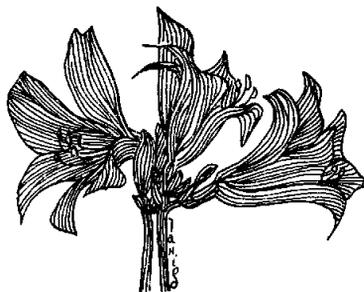


道有林の経営と自然保護

—— 岩見沢林務署の場合 ——

中 村 幸 雄



岩見沢林務署の管理する道有林は、岩見沢市のほか、三笠、美唄の三市と、栗沢、

奈井江、上砂川、浦臼および月形の五カ町にまたがり、面積約二万ha、蓄積約一三四万m³で、ha当り六八m³という数字は、道有林平均の一〇〇m³にくらべてかなり低く、森林資源としては量的にも質的にも、一八林務署のうち下から二、三番目にランクされる。この現状を反映して、単年度事業収支も昭和四十一年度で約八千万円の赤字を計上し、この点でも林務署中、四番目という、ありがたいくない実績である。

赤字の原因は、もちろん事業収益に対して事業支出が多すぎるからであるが、支出の内容を見ると、育林事業費や森林土木費などの先行投資は、ほぼ全道林務署の平均額に達している。収益が下位から二、三番目に低迷しているにもかかわらず、先行投資の予算配分が全林務署の平均額に達していることは、それだけこの管内に対する投資効果が高く評価されている結果とも見られる。

管内林野は、大きくわけて三団地にわかれ、石狩川右岸の月形・浦臼団地は全域保安林に指定されているが、そのうちクマネシリ岳（標高九七一m）を中心とする約一、五〇〇haの更新困難地を除いて、三団地とも第三紀層の丘陵性地形で、まれに七

〜八〇〇mのピークが点在する程度である。

また、気象的にも育林上の障害は少ない。多雪は、カラマツの植林の場合、成林中に根曲りや幹折れを生じやすいが、トドマツの成林には支障がなく、むしろ、植栽された幼木を寒気や寒風から保護してくれるので、プラスになる面が多い。さらに、春植への苗木を雪中仮植するなどの利用面もある。このように地形的および気象的条件は、造林環境として比較的恵まれているといえる。

そのためか、管内には大正の終わりから昭和のはじめにかけて、先輩職員が苦勞して植えたであろうトドマツの造林地のほとんどがみごとに成林して、すでに何回目かの間伐で昭和四十二年度にはかなりの収益をあげているし、戦後植えられたカラマツも利用間伐の域に達している。また、近年植えられたトドマツも、一般にカラマツにまさるとも劣らない成長ぶりをしめし、これらの既往造林地約三、四〇〇haは、この管内の造林目標面積七、〇〇〇haのなかばに達して好成績をあげているのである。現在の新植実行面積、年間二五〇〜二六〇haのペースで進めば、十四〜五年後には七、〇〇〇haの目標面積を達成し、これが成林したあかつきには、事業収支も好転して、

赤字林務署の汚名を返上することも決して夢ではない。

五十余名の職員は、この輝かしいビジョンをいただき、希望と誇りを胸に、たゆみない企業努力をつづけているのであるが、われわれの努力次第によつては、この管内の森林の将来はバラ色の夢とまでいかななくても、大きな期待を持てるのではなからうか。なんの特色もないように見える平凡な山も、詳細に見れば経営上はなかなか味のある、将来性に富んだ内容を持っているのである。

この管内の森林は、三笠市の幌内炭鉱の開発が、北海道百年の歴史とともに歩んできた点から見ても、古くから伐採開発がくり返されてきたことは明らかである。しかも札幌に近いという地利的条件からも、過伐に近い伐採がくり返されたであろうことは容易に想像がつくし、そのために森林資源が減少の一途をたどった経過は、山の現状を見ればさらに明白である。再生産のための造林事業は、戦後急速に伸びてきたとはいえ、技術的にも資金的にもまだいくたの問題をかかえており、いちど破壊された自然環境の回復は容易なわざではない。

造林事業の推進による森林資源の維持培養をはかることは、国有林、道有林、民有林を問わず、森林経営者ないしは林業技術

者にとって最高の責務であらう。しかし、関係者の努力にもかかわらず、一般に造林事業の成果が社会的経済的要請にこたえるための成功をかちとるまでには、まだかなりの長年月を必要とするようである。この管内とて事情は同様である。

さて、造林事業の推進上、技術的に未解決の問題が山積しており、造林地の条件も千差万別であって、ある地区で成功した方法が、ほかの地区で必ずしも成功するとはかぎらない。よくいい古されている適地適木とか、大面積の皆伐面を発生させないとか、保護帯や保残木を残すとかいうことは、むしろ林業技術以前の常識に属することであって、そのほかの細かい技術面になると、それぞれの対象地ごとに自然の環境や条件をよく見きわめて、もっとも適した方法を編みださなければなるまい。全道一律に普遍性のある造林技術というものは、おそらく存在しないのではなからうか。したがって、造林が成功するかいなかは、対象地の自然条件の上に立った当事者の技術と経験と努力にかかっており、それだけにむつかしい問題をふくんでいるのである。

造林事業成功のカギは、人為的に加えられる施策がよく自然の環境になじんで、自然の力にさからわないこと、いいかえれば自然の力をいかにうまく利用するかという

ことにつぎるのではなからうか。これは、天然林の択伐作業などのとり扱いにもいえることであって、自然の力にさからうような施策は、林業が土地生産業である以上失敗を招きやすい。これもまた、林業技術以前の常識かも知れないが、案外忘れられがちなこともある。

たとえば、この管内で、伐前地ごしらえや伐前植栽などの方法を取り入れて、地ごしらえの労費の軽減をはかり、ひいては成林率の向上に大きな効果をあげている。これは当然冬山造林が前提となるが、多雪という自然条件を利用した一例でもある。

また、地ごしらえの方法にしても、この署員の多年にわたる研究の結果、全刈筋おきという方法を編みだし、実行に移して成果をおさめている。これは、ササやネマガリダケを全刈して、一定の巾に筋おきすることによって、雑草やつるの繁茂をおさえる、さらに大苗を植栽することによって、下刈回数をごく少なくし、ほとんど一発造林で成林させようとするもので、地ごしらえや下刈経費の節減をねらったものであるが、従来、とかくジャマ者扱いされてきたササやネマガリダケを逆に有効に利用することによって、つるの繁茂をおさえる点で、一石二鳥の効果が期待できるのである。(これについては、二月に行なわれた

林業技術研究発表会で谷技師から発表された。)

このように自然の力をたくみにとりいれることによって、人為的な施策結果を自然環境になじませることが、森林施策の要件であろうと思われる。この管内のトドマツの優秀な生長ぶりには、われわれも意を強くしているが、ジープ道など簡易作業道もふくめて、道路網がさらに一層発達すれば、森林の手入れや管理がもっと容易にしかもすみずみまで行きとどき、荒廃した自然環境も立派に復旧するであらう。

近ごろ自然公園や景勝地などで、産業開発や観光開発の美名のもとに、貴重な自然の破壊が行なわれたり、都市や工業地の周辺で次第に緑が失われて、野生鳥獣や昆虫のすみかさもなくなくなり、人間生活が次第に殺風景になりつつあることが問題となっている。美しい田園でさえも農薬による公害が表面化し、工場の廃水は河川や沿岸の漁業をおびやかすばかりか、人間の健康さえむしばんでいる。これは、急速に発展する産業開発が、自然環境のバランスをこわし、人間生活との調和を失った結果であって、これでは「社会開発」という看板が泣くことであらう。

北海道百年の森林の歴史は、戦後二十年の造林推進の努力は一応認められるとして

も、残念ながら資源掠奪の歴史であった。屯田兵による開拓が、森林の乱採と焼払いにはじまったことは、事情やむを得なかった点があつたにしても、かえすがえすも残念なことである。

わが岩見沢林務署管内の森林の現状が、荒廃していることは事実であるが、一方では先輩職員の労苦の結晶である立派な人工林も残されている。われわれはこの貴い財産を大切に守りぬくとともに、戦後の若い造林地をこれに負けない立派な森林に仕立てて、のちの時代に引きつぐ義務がある。そうして、失われた緑と美しい自然をとり返すことができれば、道有林の経営という企業も安定し、休養や生活環境の美化という点でも、道民への最上のサービスとなるであらう。

森林経営という「企業」は、緑の資源がなければ成り立たないし、自然愛護の精神が基調とならなければならない。自然の破壊や公害の発生をともなう企業の多いなかで、森林経営ほど自然保護の精神とマッチした企業はないであらう。つぎの北海道二世紀は、この点からもほんとうの意味の「森林王国」にしたいものである。

(岩見沢林務署長)